

「収穫の日」(要旨)

聖書箇所：マタイの福音書13章24~43節

【1】 天の御国が近づいた

天の御国を待ち望んでいた人々は、主イエスの「天の御国が近づいた」(マタイ 10:7)、「神の国はあなたがたのところに来ている」(マタイ 12:28) という宣言に沸き立ちました。キリストの到来によって、神の国が到来した。遂に「悪い者の子ら」(マタイ 13:38) が裁かれる日が来たのだと。ところが、依然として神の裁きが実現しているように見えません。これは一体どういうことなのかと問う者たちに、イエスは次のたとえを語られました。

【2】 「畑の毒麦のたとえ」と説き明かし

主イエスは天の御国を「畑の毒麦のたとえ」で教えられました。そのあらすじを確認しましょう。ある人が自分の畑に良い種を蒔いた。ところが敵が来てこっそりと麦の中に毒麦を蒔き立ち去った。毒麦を発見したしもべたちは主人に毒麦を抜き集めると申し出た。主人は収穫まで良い麦も毒麦も両方とも育つままにしておくよう命じた。その意図は毒麦と良い麦を正確に選り分けるためには収穫の時まで待つ必要があるというものであった。

このたとえは、毒麦を取り除くのが困難であるから放っておくようにというものではありません。主人は、毒麦のことで頭がいっぱいになったしもべたちに、収穫の時、自らが刈る者に命じて毒麦を取り除くと約束しました。しもべたちには、毒麦のことに心奪われることなく忍耐して待つようにと語ったのでした。

▷毒麦を見つけた「しもべ」たちのような気持ちになったことがありますか？

【3】 神の国を待ち望む

神の国と聞くと、死後の世界や未来の理想郷というイメージを抱く場合もあるでしょう。福音書の記者は、救い主イエスと共に天の御国が到来したと伝えます。

神の国は、罪の悔い改めと信仰によって、イエスが「主」とであると認められているところでは、どこでも存在しています(ルカ 17:20~21)。すると次のような問いが生まれます。どうして世に存在する悪を神は見過ごしているのか。悪しき者たちが大手を振っているのを神は許容されるのか、と。イエスはすでに神の国が到来した、と宣言した上で、神の国の完成という意味ではやがて到来するものとして教えられたのです。私たちは、悪が優勢に思える世界に生きています。神はそうした悪に対して無力であるのでも黙認しているのでもないのです。『敵(悪魔)がしたことだ。』(マタイ 13:28,39) とその原因もご存知です。そして終わりの日の裁きを宣告されました(マタイ 13:41~42)。

イエスは天の御国を「からし種」や「パン種」にたとえて、人の想像を超えるほどの豊かな収穫を教えました(マタイ 13:31~33)。私たちは、「主人」に代わって「毒麦」を抜き取ろうとします。神は私たちのように人を裁かず、憐れみ深く、忍耐強く待っておられるのです。それは「誰も滅びることがなく、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられる」からです(IIペテロ 3:8~13)。

▷「いつか…」ではなく、今日イエスの主権を認め、悔い改めて、神の国を待ち望む「御国の子ら」として歩むことができますように。

